

## Ⅱ 実施状況報告

### A スーパーサイエンス文化講演会

#### 1 「憧れと感動、そして志」 野依良治先生

##### (1) 目標

ノーベル化学賞を始め、数々の世界的に名誉ある賞を受賞された、独立行政法人理化学研究所理事長の野依良治先生の講演を聞くことにより、先生の研究者としての姿勢や情熱を感じ取り、生徒に科学を学ぶ意欲を喚起する。

また、地元中学生の代表や保護者、高等学校の理科教諭を招くことで、地域への情報発信の契機とするとともに、探究する心を重視した学校文化の醸成を図る。

##### (2) 方法および内容

###### ア 対象

- (ア) 本校全生徒、職員、保護者
- (イ) 一宮市内中学校代表生徒および教諭
- (ウ) 尾張地区高等学校理科教諭

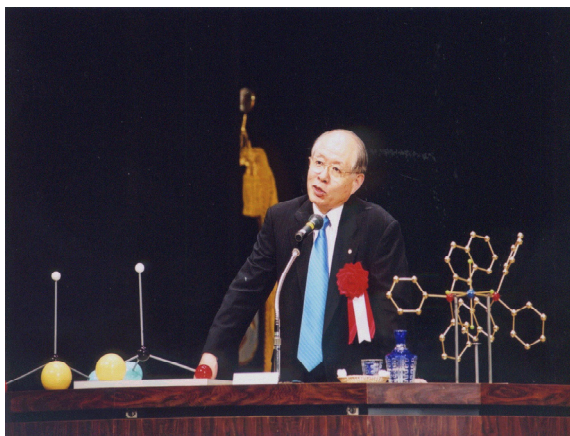
###### イ 日程・場所 平成16年5月21日(金)

10:00～13:00 一宮市民会館

###### ウ 内容

###### (ア) 本校教師の事前講義

野依先生の研究内容である「不斉合成性」についての理解を深めるため、本校理科教諭の鶴田治之が説明した。



野依良治先生・講演の様子

###### (イ) 講演

講演は次のような内容展開であった。

- 1 始めに
- 2 私たち人間はどう生きていくべきか
- 3 自然とは何か
- 4 技術革新の世紀
- 5 小学校・中学校・高等学校時代
- 6 大学時代以降の生い立ち
- 7 研究内容
- 8 研究モットー
- 9 科学研究の評価の要素
- 10 「オンリーワン」の薦め
- 11 現代社会の問題点
- 12 文化の要素

以上のような内容で、模型やスライドを用いながら、分かりやすくお話をしていただけだ。

自分が生まれてから小学校・中学校・高等学校での体験や経験、人や科学との出会い。科学を志したきっかけ等を写真や実話を交え、丁寧に説明された。

特に、人間形成で非常に重要な時期である中学校と高等学校時代は、毎日の学習もさることながら、部活動で柔道に打ち込み、文武両道にわたりがんばったこと。さまざまな教科や分野のすばらしい先生方に会ったことが、いい経験となり財産となっていること。また、京都大学へ進学してからも、大変立派な先生方に会い、その影響を大きく受け、化学に邁進したこと。研究中にふとしたことから不斉化学反応に関するアイデ

アが浮かび、これを機会にして、この研究を続けようと思ったこと。その後、京都大学から名古屋大学に移り、さらにはアメリカの大学の研究者としての研究生活から、日米の研究施設や研究体制の違い、そこでの経験談など、ノーベル賞受賞の研究の素地となった話。

そして実際のノーベル賞受賞研究の内容説明や紹介。そしてそれが我々の日常生活の中にどのように活かされ役に立っているかといった話へと続き、自身の研究のモットーである「研究は瑞々しく、単純明快でありたい」こと、「機能は美なり」ということへと進んだ。また、先生自身のお考えの科学研究の評価や科学者のあり方、独創の育成やオンリーワンの薦めを話され、学生たちを激励された。

最後に、現代社会が抱える問題点、とりわけわが国の問題点として、文化の衰退を挙げられ、言語・情緒・論理・科学と文化の結びつきの強さを説かれた。いい科学にはいい感性、それには言語とくに国語力の大切さを自覚して取り組んで欲しいと学生を激励され、話を締めくくられた。



講演会場内の様子

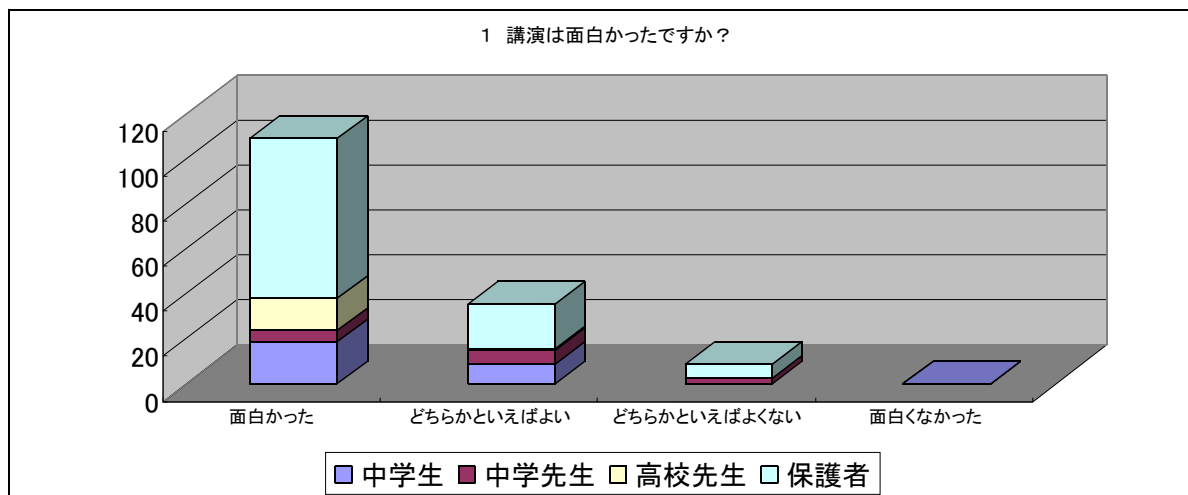
(ウ) 質疑応答

講演終了後、質疑応答の時間を設けた。質問は、不斉触媒はどうやって作るのかという講義の内容に関することから、科学と社会や教育との関わりに関することまで、生徒だけでなく保護者からも出され、予定に時間を過ぎて、野依先生は一つ一つ丁寧にお答えをさせていただけた。

(3) 検証

ア 事業実施による成果

以下に、講演後に実施したアンケート結果を示す。



アンケート結果1～4から、野依先生の講義が大変面白く理解しやすいものであったと言える。専門的な内容の箇所も、事前の本校教諭による講義により、かなりわかりやすくなったと考えられる。ただし、アンケート結果の4から見えるように、化学の学習がまだ進んでいない1年生では理解度は低かったと言える。

しかし、全体的にはこの文化講演会が生徒達にとって有意義なものであり、今後の進路選択や学習への取り組みに少なからず影響を与えたと確信できる。「科学者の卵」たる生徒を1人でも多く生み出すべく今後も有意義なSSH活動が続けていきたいと思う。

